

故松井七郎先生を偲んで

榎 原 胖 夫

松井先生はとことんまじめな方だった。まじめすぎて面白くないと思った人も少なくあったであろう。しかし松井先生はユーモアがわからない人ではなかった。人の冗談にはよく大声で笑われた。しかし自分から冗談をおっしゃることはまれだった。

松井先生の講義は面白いとはいえなかった。余談がほとんどなかったからである。先生の講義は事実の列のように思われ、背後にある理論がみえなかった。私が先生の講義の意味と理論を多少とも理解するようになったのは、ヴェブレン、コモنز、パールマンなど制度派の仕事を数多く読み、それらについて書くようになってからであった。大学をでて十年もたつてからである。

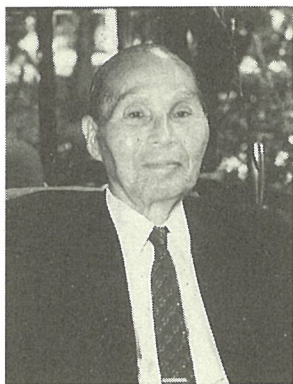
先生の性格は、その小さいやさしい眼にもっともよく表われていた。先生は善意的かな個人主義者であり、キリスト者であった。人に干渉したり、人を傷つけたりすることはきらいであった。そのかわりに人に干渉されることもおきらいであったと思う。大きな体に似ず、受身で辛抱づよい方だった。

先生の印象——私をもつ先生のイメージは学生として先生の授業をはじめて聞いた一九

五一年以来ほとんど変っていない。私は幸運にもいろいろなかたちで先生におつきあいさせていただいた。一九五四年秋にはアーモスト大学のソープ教授のクラスで先生の英語の講義を聞いた。アメリカから帰って古米さんや山下文一君といっしょに先生のお宅でパールマンの翻訳のお手伝いをした。後年とさき先生と暮をうった。そして晩年先生が退職されてからは校友会のパーティなどよくお会いした。先生は次第に年こそ召されたが、少しも変わることはない先生であった。

松井先生の奥さまはおとなしい先生にたいしてバランスをとるかのように積極的な方だった。先生の家におじやますると、先生は何もおっしゃらないのに、奥さまにピシヤリとやられた。「榎原さん、太りすぎよ。あんまり勉強してないんでしょ。」というあんばいである。奥さまは若い人と議論するのが好きだった。若いものと奥さまが泡をとばして議論していると、先生は横でニコニコしながらだまって聞いておられた。

最愛の奥様が亡くなられたことは先生にとって大きな痛手だったにちがいない。御家族にたいしてはどうだったかしらないが、先生



は少なくとも私どもにたいしては嘆きの表情をみせられたことはなかった。

松井先生の後継者は古米さんであった。古米さんは大学では私の一年先輩であったが、年は十一歳も上だった。古米さんにたいして松井先生はアメリカに行くことをすすめるが、デューク大学へ留学の世話をなされたが、あとは自分の労働関係の仕事の手伝いを時として依頼されるだけで、研究の指針等は何も与えられなかったらしい。自分の仕事から学べという姿勢だった。その古米さんが先に他界されたとき、松井先生は大きなショックをうけられたにちがいないかった。しかし古米さんが亡くなられた数日後松井先生とお会いしたときには、先生はまるで世間話のように古米先生の死について冷静に話されていた。

先生は一九二〇年代にアメリカで学ばれ、ウィスコンシン大学でPh.D.の学位をとられた。先生はジョン・R・コモنزの弟子で、学位論文は「日本の絹織物工業の労働問題」であったときいている。同志社へは海老名総長の秘書として就職されたらしい。

そのころ同志社の法学部経済学科には「帝国大学」出身の若手のマルクス経済学者が多

く、アメリカの大学の学位などまったく評価されなかった。何らかの事情で労働経済の担当者が急に必要になり、「総長秘書がアメリカで聞いた労働経済の講義ノートをもっている」ということで経済学科の講師になられたとのことである。そのことは同時期の他の教授から聞いた。

今から考えるとずいぶん失礼な話だが、当時の同志社の事情を考えると、さもありなんという感じがする。松井先生もおそらく不快に思われたであろうが、その話をなされたことも、その思いを口にされたこともなかった。

先生はその母校同志社をこよなく愛された。先生は自分の感情を表現することがまるで下手で不細工だった。先生は晩年校友会にだまって壹千万円の寄附をなされた。先生の母校にたいする深い愛を象徴的にしめすことであった。

(大学経済学部教授)

井上二郎先生を偲んで

次 新 村 店

本気のおしゃれ心からだったのか、それとも、みなを楽しませてやろうという茶目っ氣からだったのか、いまだにその点がよくわからないのだが、時どき井上先生が風変わりな帽子をかぶって現われ、私が思わず笑ってしまうということがよくあった。

それこそ頭のとつぺんから爪の先まで、いちぶの隙もみせないドレッサーぶりで有名な井上さんのことから、やはりおしゃれからだったのだとみるべきだろう。なにしろその帽子は、そんじょそこらで見つかるようなありきたりのしろものではなくて、よほどのこだわりでもって搜しまわった末の掘り出し物と言いたげな、個性目にもしるき逸品だったからである。しかし、眼鏡のなかでくりくりまわっているようないたずらっぽいあの人の目とつしよにその帽子が現われると、私はどうしても笑ってしまうのであった。そんなふうには、笑ってはいけないうところで楽しく吹き出してしまふところに、井上さんが好んで買っていた笑わせ役としての、コミカルを主軸とする処世術の効果があつたのだと思う。

独身の自由さを買いたあの人のおしゃれ

は、われわれの環境としては超一流のものであったが、かと言って、決して二枚目におさまるのをよしとせぬあの人のしたたかなシニスムが、あの帽子に象徴されていたように思えてならない。むしろつねに、三枚目を装うことにこそ快感を味わっているふりをしている井上さんだったからである。しかしその装いのかなたに、頑固一徹な批判精神がうずくまっていた、めつたにないことではあったが、それにカツンとつきあたったときの意外性は、まさに衝撃的と称してよいものであった。

天理大学の専任だった私が同志社に非常勤として寄せてもらうことになったとき（昭和二十七年）、すでに井上さんは先輩非常勤講師として同志社で教えておられた。だのに私が、翌年すぐに天理大学を辞して同志社の専任助教授として奉職することになったのである。

私はそのころの自分の心境や振舞いについて、その後よく反省させられることになった。それは私自身の度しがたい無神経さと、井上さんのあくまで控え目な自制と忍耐の姿勢についてであった。専任をもっていなかった井上さんは、もちろん同志社に迎ええられることを願っていたのだ。だのにあとからやってき



た私が、何ということもなしに、井上さんをさしおいて先を行ってしまった。思い出すとそれもやはり、井上さんの徹底的に自己主張をおさえた地味な身の処しかたと、派手で目だちたがりやの私との差からくる、周囲の理解の行き違いだったのだが、井上さんがそれについて不快な素振りひとつ見せないことをよいことに、私はそのとき、なんの心をわずらわすこともなく、当たりまえのように振舞っていたのだった。私は後年このことを思つて、自分の性格に巣くうみにくい欠陥と、井上さんのまねのできぬ偉さとを、しみじみ思いしらされることになったのだった。

井上先生退職記念パーティで、あの人自分の一代記のようなことについて話された。それは、とてもわれわれでは想像もつかぬほどの辛苦と忍耐の連続の半生であった。井上さんはそれを、なんのてらいも飾り気もなく、素朴にたんとんと語られた。そして私はそのときはじめて、あの若き日の私の無神経さをゆるしていた、井上さんの度量を育てたものが何であったかを思いしらされた。そしてそのとき同時に、あの人のおしゃれ、つまり服装への願望がいつ頃どこで芽ぶいていたのか

をもしらされた。

ジェラルド・ド・ネルヴァル。この孤独で神秘的詩人は、井上さんが生涯を打ちこむのには最も似つかわしい存在ではなかったろうか。井上さんの風姿をそのままに、決してみかけは大型の作家ではなかったが、ひと筋に理想の女性像を追いつめて、夢と現実の薄明のなかを、求心的に巡りさまよった、悲しいまでに一徹な求道の生涯。ただしその真摯なわずかの作品によつて、十九世紀ロマン派の時代に早くもブルーストの文学を予告していた幽玄な病める精神に、井上さんは強くひかれ、そしてこの人を通じてオキュルティズムにもふかく入りこんでいた。私はその分野であの人と趣味を同じくしていた。

そのネルヴァルはある朝、シャトレの街の一角で、遺体となつて発見された。そして井上さんもまたいつともしれずこの世と訣別して、静かに自室に横たわり、ある朝兄上の胸に抱きあげられたと聞く。

孤独な境遇のうちにも、自由で豊かな精神生活をまっとうされた井上二郎先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(大学名誉教授)